

## 宇部の長生炭鉱と戦時中の朝鮮人労働者

### The Cho-Sei coal mine in Ube under WW II , and Chosen labors

李 修京, 湯野 優子

YI Sookyung, YUNO Yuko

外国語・外国文化研究講座\*

#### 要旨

日中戦争の勃発後、戦争の長期化・激化によって多くの日本人が戦場に駆り立てられ、戦時労働力の不足は植民地、とりわけ朝鮮人労働者などで補充された。その際、山口県は大陸への玄関口と言われ、宇部市は朝鮮半島と近い臨海炭鉱地という地理的条件から炭鉱の活性化が促進されたところであり、朝鮮からの戦時労働者も多く動員・配置されたところである。そして、劣悪な炭鉱環境の中で多くの朝鮮人労働者が犠牲となった。本稿では宇部市の炭鉱の中でも水非常事故によって現在も遺族への遺骨返還が行われていない長生炭鉱を中心に考察し、戦争の実状と非人道的事故処理について検証してみる。

山口県吉敷郡西岐波村1456番地に所在した長生炭鉱は1914年に礮辺啓作によって開鉱された海底炭田だが、後の1940年に山田新松に引き継がれ、頼尊淵之助によって経営されるようになった。炭鉱は新浦炭鉱の海岸沿いの南に位置した。最盛期の昭和15年には992人が働き、15.3万トンの石炭を産出した中規模の炭鉱であった。また、朝鮮人労働者が多いことから「朝鮮炭鉱」とも呼ばれていた。しかし、1942年2月3日午前、海底陥落による海水侵入で183人（中で133人は朝鮮からの労働者で、多くの労働者の給与は現金よりも金券であった）の労働者が海底に埋もれてしまった。当時の炭鉱の中でも長生炭鉱は不安定な基盤に海底炭鉱を設けていたが、その背景にはそもそも問題が多い炭鉱環境があった。本稿ではそういった炭鉱問題と事故処理、今でも総括できない現状を分析し、現代に生きる我々の視点から過去の戦時中の歴史を再考する。

---

\* Department of Humanities & Social Science